多文化共生研究所　主催

第１回 ランチセミナー

亀井伸孝（国際関係学科准教授）
「手話の世界を訪ねよう：文化人類学と言語学の試み」

ろう者が話す手話は、世界共通の身ぶりではなく、各地域の耳の聞こえない人たちによって共有され世代間伝承されている自然言語の数々であることが次第に知られるようになってきました。

今回のランチセミナーでは、手話とはどのような言語であるか、手話を話す人たちはどのような文化をもっているかについて概観し、報告者がアフリカ諸国で実施している調査の様子について語ります。

お弁当を食べながら、参加してみませんか？

お気軽にお越しください。

日時

２０１６年６月７日（火）
１２：０５～昼休み H棟００３教室
（30分前から開場、食事可）

愛知県立大学多文化共生研究所ランチセミナー（第１回）
手話の世界を訪ねよう
文化人類学と言語学の試み

愛知県立大学外国語学部国際関係学科
亀井伸孝

報告の概要

ろう者が話す手話は、世界共通の身ぶりではなく、各地域の耳の聞こえない人たちによって共有され、世代間伝承されている自然言語の数かずであることが次第に知られるようになってきた。今回のランチセミナーでは、手話とはどのような言語であるか、手話を話す人たちはどのような文化をもっているかについて概観し、報告者がアフリカ諸国で実施している調査の様子について話題提供する。

手話という多言語世界

基本認識として、手話は固有の文法をそなえた自然言語であり、地域によって異なる諸言語である。世界には少なくとも 141 の異なる手話言語が分布している（Ethnologue）。これらの手話は、世界各地の地域のろう者たちの間で世代間伝承されており、音声言語と関わりのない固有の言語分布と歴史をもっている。手話言語を話すろう者は、固有の慣習、価値観、歴史観など、すなわち文化をもっていることも指摘されている。手話は人類の言語文化の一角を占める諸言語であるにもかかわらず、しばしば言語としての認知を受けてこなかった。近年では、岩波書店『広辞苑』、丸善『文化人類学事典』『社会学事典』、国立民族学博物館の言語展示などでも、手話を言語であると明記する例が増えてきている。

音声の少数言語との違い

手話は、音声の少数言語と類似している特徴を多くそなえている。一方で、手話はおもに耳が聞こえない人たちの間で伝承されるという特徴をもつため、音声の少数言語とは異なる諸側面をもあわせもつ。具体的には、「手話は、多くの場合、親から子へではなく、聞こえない人たちの先輩から後輩へと伝承される」、「時間をかけて訓練しても、多数派の言語を習得することは困難であり、相手に合わせることが難しい」、「手話言語は、一般に文字をもたない」などである。音声少数言語との類似性を念頭に置きつつも、同列には論じられない特性をもつという面について理解を深めることが欠かせない。

ろう文化（Deaf culture）

「文化」とは、ある集団で習得、共有、伝達される生活・行動様式の総称である。聞こえないこと（聴覚障害）それ自体は文化ではないが、聞こえない人たちが集まりをなして手話という言語が生じると、それに関連するさまざまなことが習得、共有、伝達されるようになる。これを「ろう文化」と総称する。ろう文化に関する文化人類学的研究も、近年では世界各地で取り組まれるようになった（亀井, 2009）。

アフリカにおけるフィールドワーク

報告者は、おもにフランス語圏の西・中部アフリカ 9 か国で長期調査に携わってきた。アメリカ手話をルーツとし、音声・書記フランス語の影響が加わった「フランス語圏アフリカ手話」を習得し、それを用いて文化人類学的な参与観察を行うほか、辞典の編集などにも取り組んできている（亀井, 2006）。

亀井伸孝. 2009.『手話の世界を訪ねよう』(岩波ジュニア新書 630) 東京: 岩波書店.
亀井伸孝. 2006.『アフリカのろう者と手話の歴史: A・J・フォスターの「王国」を訪ねて』東京: 明石書店.
Ethnologue https://www.ethnologue.com/ (2016 年 6 月 7 日閲覧)